opusdei.org

聖ホセマリアの生涯 - 3

真っ白な雪の上に裸足の足跡が続いているのを目にしたホセマリは司祭となる決心をしました。弟は生まれる。お父さんは亡くなりました。

2020/08/06

スペインは暖かい国と思われるかもしれませんが、冬はかなり寒いです。 1917年の年末ログローニョは厳しい寒波に襲われました。 クリスマス休暇のある朝、ホセマリアが外に 出てみると、真っ白な雪の上に裸足の足跡が続いているのを目にしました。それはある修道士が残したものでした。彼は深い感動を覚え、「神様と隣人のためにこんな苦行をする人がいるのに、自分は何もしなくていいのだろうか」と考えました。

1918年の春、将来の進路を決める時期になりました。ホセマリアは神のお望みに応えるために、とりあ

えず司祭になろうと決心し、それを 父親に打ち明けました。

ホセ氏は「息子よ、よく考えなさ い。家庭を持たないことは辛いこと だよ」と言って二粒の涙を流したそ うです。「父が泣くのを見たのは、 後にも先にもこのときだけです」と ホセマリアは言っています。ホセ氏 には家族の計画を変更せねばならな いこと、息子がその理想実現の過程 でぶつかるだろう困難、などが頭に 浮かんだのでしょう。「でも反対は しない」と言い切り、友人の司祭に 紹介し、同時に法律の勉強もするよ う助言を与えました。このとき、ホ セマリアは両親を助ける義務につい て考えました。そして、瞬間的に将 来両親を支えることのできる弟を下 さいと神に頼んだのです。しかし、 この祈りについてはすぐに忘れてし まいました。

ホセマリアが司祭になる決心をした という噂は、友人や知人を驚かせま した。実はホセマリア自身、雪の上 の足跡を見るまで、司祭になろうと いう考えはまったく持っていなかっ たのです。

1920年秋、本格的に神学校で学ぶため、両親の家を離れてサラゴサという町に引っ越し。この町はローマ時代にさかのぼる由緒ある町で、

ホセマリアが神学校に入ったのはも ちろん司祭になるためでしたが、彼 にとって司祭になることは神のお望 みを果たすための手段でした。しか し、肝心の神のお望みが何であるの かがまだわかりません。そこで、

「主よ、見えますように」という短い祈りを何度となく繰り返していました。まるで暗闇の中で一条の光を求めるかのように。

神学校での生活はつらい出来事を交 えながらも順調に進んでいきまし た。そろそろ司祭叙階の準備が始ま ろうとした1924年秋「父、危 篤」の電報が届きました。ホセマリ アは大急ぎで帰省しましたが、ホセ 氏は部屋の床の上に遺体となって横 たわっていました。「父は消耗し きって死にました。口元には微笑を 浮かべて」。この父の思い出はその 後苦難の中でホセマリアを支え続け ます。「父が苦しさを表に出さず、 喜びのうちに苦しむのを見まし た。・・私はどれほど多くを学んだ ことでしょうし。

大黒柱を失った家族に、ホセマリアは自分が亡き父に代わって彼らの面倒を見ると約束しました。こうした苦境の中で1925年3月28日ホセマリアは司祭になるのです。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-3/(2025/12/15)